

サイ・テラ こころも・知と技の発信

【39】

埼玉大学・理工学研究の現場

環境計画、環境設計と包括的論、景観設計論は、自然、道路に呼ばれる分野は、現実の人々や橋等の社会基盤施設、建築等が生活する環境を扱ったため、工の環境を形作るさまざまな要素が技術だけでなく人文社会科学を、総体として適切に配置する等広範囲の領域にクロスオーバー方法論である。

景観は土地の上に形成される一面的に關係する。そのため研究面では、工学的手法に加えて人文社会科学的な概念や方法を用いることも多い。

■人間の視点

研究の基軸である景観計画

から70年代の高度経済成長期に国土の環境を大きく変貌させたが、国際的な観点から見て経済力にふさわしい環境や景観を形成してきたか、疑問視されてきた。特に、多くの一般市民が日常目にする都市の景観は、全国



埼玉経済

より良い景観の在り方と形成

窪田 陽一 埼玉大学大学院 理工学研究科教授

各地で問題を抱えており、より良い景観のあり方とその形成手法の提案が求められている。

■問題視

研究課題に直結するこれらの状況を踏まえて、景観の状態が人々に及ぼす影響を明らかにし、都市景観の整序手法を提案する研究を永年手掛けている。

最近の研究では、日本の景観で最も問題となっている電線・電柱や広告・看板の配置形態や色彩が及ぼす影響を、コンピュータ・シミュレーション技術と環境心理学の手法を応用して定量的に分析し、評価基準と設計手法を提案して景観改善効果の検証をしている。

例えば、全面的な地中化が望ましいとされながら経費面の問題で整理が進まない電線類は、同じ本数が道路上にある場合、横断方向の架空線が錯綜感を増すことが定量的に示され、その再配置により景観改善効果が現

れることが確認されている。また、景観法や景観条例の施行により、各地でまちなみの色彩規制が行われているが、昼間の景観を想定して夜間照明と色彩の関係の基盤がないこと

■埼玉伝統工芸会館

工学部の環境共生学科で、自然と人間社会の共生の方法を扱う「環境まちづくり」「環境共生設計論」「環境共生設計演習」

窪田 陽一氏(くぼた・よういち) 51年生まれ。東京大学大学院修了。工学博士。95年から現職。環境計画・環境設計、特に景観計画・景観設計を中心に研究・教育に従事。与野本町駅西口駅前広場 電電甘木大橋のデザインに携わり土木学会「サザイン賞」を受賞。主な著書に「都市再生のパラダイム」(パルコ出版)など。

研究を踏まえた社会貢献として、東京港のレインボーブリッジ、羽田空港のスカイアーチ他

企業、団体商店街などの話題や情報をお寄せ下さい
TEL 048・795・9161 FAX 048・653・9040